Journal of Asian and African Studies, No.97, 2019

【論　文】

ンゼマ語の可譲渡／不可譲渡名詞*

古　閑　恭　子

Alienable and Inalienable Nouns in Nzema

Koga, Kyoko

Nzema (Niger-Congo, Kwa) distinguishes inalienable nouns from alienable nouns in possessive constructions. Chinebuah (1971) has shown that in Nzema, inalienable nouns take different forms in possessive constructions. However, his work focuses mainly on the morphological features of inalienable possession, with no reference to phonological features. In this paper, I argue that phonological features are also important in distinguishing inalienable and alienable possession. A new observation is that alienable possession with no morphological change still exhibits phonological (tonal) changes with different patterns from those found in inalienable possession.

The new data come from my own fieldwork. First, affixes of inalienable nouns become null in possessive constructions, but those of alienable nouns remain intact. Second, in the case of proper nouns, the possessive marker *a-* is added to inalienable nouns, while no such marker is added to alienable nouns. Third, tonal changes of alienable nouns in possessive constructions are limited to the prefix or the root-initial syllable. A wholesale tonal change is observed in roots of inalienable nouns. In sum, alienable possessions are marked only by a tonal change, whereas inalienable possessions are marked in a phonologically/morphologically complex way: tonal lowering of the entire root, epenthesis of the possessive marker *a-* (in constructions with proper nouns), or root-initial high tone (in constructions with a possessive clitic). It is not the case, however, that the patterns in Nzema contradict the general tendency for markers of inalienable possession to be simpler than those of alienable possession. The phonological/morphological changes in inalienable possession in fact reduce the number of syllables in possessive constructions and target the entire root for tonal lowering.

The possessive constructions *ɔ̀=zì* 'his/her father' (*sìlɛ́* 'father'), *ò=lì̀* 'his/her mother' (*nìlí* 'mother'), and *ò=hù*, 'her husband' (*kùlí* 'husband') are even simpler than those of other inalienable nouns in that (a) the roots are monosyllabic,

Keywords: Nzema, Niger-Congo, Kwa, alienable nouns, inalienable nouns

キーワード： **ンゼマ語，ニジェール・コンゴ語族，クワ語派，可譲渡名詞，不可譲渡名詞**

＊本研究は，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用共同研究課題（アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究）に関わるものである。また，JSPS 科学研究費補助金（課題番号 15K02519）の助成を受けた。

本稿の著作権は著者が保持し，クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY）下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

(b) the tone of possessive constructions with possessive clitics as a whole is low, and (c) consonant lenition occurs. The patterns found in Nzema suggest that the degree of inalienability is correlated with the morphological and phonological simplicity of possessive constructions; the simpler the morphological and phonological structure of the possessive construction, the more inalienable the possession.

1. はじめに
2. 可譲渡／不可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴
2.1 不可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴
2.2 可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴
3. まとめと考察

1. はじめに

本稿では，ンゼマ語（Nzema：ニジェール・コンゴ語族クワ語派）[1] の可譲渡／不可譲渡名詞を取り上げる。世界の多くの言語で，可譲渡／不可譲渡名詞の区別が見られる[2]。可譲渡名詞と不可譲渡名詞は，意味的に以下のように区別される。不可譲渡名詞は，生まれながらにして持っており，他人から手に入れたり，人に譲ったりできないものを表す語である。一方，可譲渡名詞は，自由に他人から手に入れたり，人に譲ったりできるものを表す語である（Nichols 1988: 568）。具体的には，不可譲渡名詞が表すものは，主として，親族，身体部位や位置関係など，所有者との関係を切り離すことができない。また，原則として所有者の表示が必須である（Welmers 1973: 212）[3]。

形式的には，両者の区別は，所有構文における所有マーカーの有無や所有マーカーの形態・統語論的違いなどに現れる。多くの言語では可譲渡名詞には所有マーカーを用いるが，不可譲渡名詞にはそういった要素を用いず，所有者名詞と被所有名詞を並列させる（Creissels 2000: 249）[4]。また，可譲渡／不可譲渡名詞の両方とも所有マーカーを取る場合，ほとんどの言語において不可譲渡名詞のマーカーの方が短く，形態論的に単純である（Nichols 1988: 564）。

アフリカの多くの言語でも可譲渡／不可譲渡名詞の区別が認められる（Creissels 2000: 249）。興味深いのは，アフリカ諸語には，浮き声調よりなる所有マーカーを持つ言語が見られることである。これは，もともと音素と声調とからなる形態素から音素が脱落して声調だけが残ったものと考えられる（清水 1988: 404）。アカン語（Akan：ニジェール・コンゴ語族ク

1) タノ小語群（Tano）ンゼマ・アハンタグループ（Nzema-Ahanta）。ガーナとコート・ジボワールにまたがる大西洋岸の地域において 30 万人ほどの話者に使用される（Lewis ed. 2009）。ガーナ最大の民族語であるアカン語（Akan）とりわけファンテ方言（Fante）の影響を受けているといわれる（Berry 1955: 160）。

2) WALS（The World Atlas of Language Structures）によると，所有構文において可譲渡／不可譲渡名詞の対立を持つ言語は，ユーラシア大陸をのぞくあらゆる地域によく見られるという（Nichols and Bickel 2013）。

3) ただし，可譲渡／不可譲渡名詞は峻別できるものではなく，ほとんどの言語において，意味的には譲渡できないにも関わらず不可譲渡名詞に属さないものが存在する（Nichols 1988: 568）。

4) このような形式上の特徴は，不可譲渡名詞と所有者が，可譲渡名詞と所有者よりも結びつきが強いことを反映している（Haiman 1985: 130）。

ワ語派)[5] では，主に親族を表す語からなるグループ（不可譲渡名詞）が，その他の語からなるグループ（可譲渡名詞）と所有構文において対立する[6]。(1) の例で，不可譲渡名詞 *wɔ̀fà* も可譲渡名詞 *bàǹkyì* も，所有構文は所有者名詞と被所有名詞の並列という形を取るが，可譲渡名詞は語根頭が高声調になる。これは，もともと所有接語が持っていた浮き高声調が語根頭に実現したものである。不可譲渡名詞ではそのような変化がない（Dolphyne 1986，1988，古閑 2009）。

(1)　*wɔ̀fà*　　*bàǹkyì*
　　「オジ」　　「キャッサバ」
　　Kɔ̀fí wɔ̀fà　　*Kɔ̀fí báǹkyì*
　　「コフィのオジ」　　「コフィのキャッサバ」

ンゼマ語にも可譲渡／不可譲渡名詞の区別があることは，Chinebuah（1971）によって指摘されている。ンゼマ語は系統的にアカン語に非常に近いが，可譲渡／不可譲渡名詞の区別の仕方はかなり異なる[7]。アカン語では可譲渡／不可譲渡名詞の区別は声調面にのみ現れるが，ンゼマ語は形態上の違いが顕著である。Chinebuah (1971) は, 不可譲渡名詞が, 単独で現れる形, 固有名詞を伴う所有構文，所有接語を伴う所有構文の環境により 3 つの異なる形を持つことを示した。しかし彼は，ンゼマ語の可譲渡／不可譲渡名詞の区別に関わるもうひとつの重要な側面である音韻論的側面についてほとんど言及していない。また，音韻変化は不可譲渡名詞だけでなく可譲渡名詞の所有構文にも起こるが，Chinebuah（1971）を含めてこのことに言及する研究は皆無である。

本稿では，ンゼマ語の可譲渡／不可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴を提示し，形態論的特徴と同様に, 音韻論的特徴もンゼマ語の可譲渡／不可譲渡名詞の区別に関わっていることを示す。なお，本稿で用いるデータは，断りのない限り，筆者が現地調査で得たものである[8]。

本稿で用いる表記とそれに対応する概略的音価は以下の通りである。

5）アカン語は，ンゼマ語と同じタノ小語群のアカングループ（Akan）に属する。ここで提示するのはアサンテ方言（Asante）のもの。

6）以下は可譲渡名詞と不可譲渡名詞の例である（古閑 2009）。
可譲渡名詞：*bɔ́tɔ́*「袋」, *ǹgómá*「革」, *sìká*「お金」, *ǹtòmá*「布」, *ɔ̀pɔ̀ǹkɔ́*「馬」, *èwú!rá*「雑草」, *sɔ́fì*「シャベル」, *sí!káń*「刃物」, *àpètèhyì*「蒸留酒」, *ètí*「頭」, *ànóó*「口」, *ǹsá*「手」, *sìrè*「太もも」, *dɔ̀m̀pé*「骨」, *èmó!gyá*「血」, *àtàbáń*「翼」, *bàbàsò*「性病」, *bɔ̀sɔ́!mí*「月」
不可譲渡名詞：*pàpá*「父」, *màámí*「母」, *ònúá*「兄弟姉妹」, *sìwáá*「オバ」, *òwúrà*「主人」, *èfíť*「垢」, *ènáḿ*「肉」, *èpò*「海」, *ǹsá̋*「酒」
なお，ここでいう可譲渡／不可譲渡名詞は，Dolphyne（1988）による Class I ／ Class II に対応する。筆者とは逆に，Dolphyne（1988）は身体部位を表す語を含む Class I が不可譲渡名詞であるとする。しかし，Class I の方が圧倒的に数が多いこと（古閑（2009）では普通名詞 544 語中 444 語），Class II に属すのが主に親族を表す語であることから，実際は Class II が不可譲渡名詞であると考えられる（古閑 2009. なお，エウェ語（Ewe：ニジェール・コンゴ語族クワ語派）のように身体部位名称が可譲渡名詞に分類される言語もまれにある（cf. Ameka 1996））。

7）本稿では扱わないが，意味的な規準も，両言語は異なる。親族を表す語はアカン語でもンゼマ語でも不可譲渡名詞であるが，身体部位を表す語はンゼマ語では不可譲渡名詞であるがアカン語では可譲渡名詞である。

8）調査地は，ガーナ，ウェスタン州のコート・ジボワール国境近い大西洋岸のボニェレ（Bɔnyɛlɛ）という村である。インフォーマントは生え抜きの 50 歳代の女性で，調査は 2015 年 9 月に行った。

子音：p [p], b [b], t [t], d [d], ky [c], gy [ɟ], k [k], g [g], kp [kp], gb [gb], m [m], n [n~ŋ], ny [ɲ], f [f], v [v], s [s], z [z], h [h], r [ɣ], l [l], w [w], y [j].

母音：i [i], ĩ [ĩ], ɪ [ɪ], ĩ [ĩ], e [e], ɛ [ɛ], a [a~ɜ], ã [ã~ɜ̃], ɔ [ɔ], o [o], ʊ [ʊ], õ [õ], u [u], ũ [ũ].

これらの母音は，舌根前進性 [ATR] に基づき，a 以外の 8 母音が [+ATR] グループ i，e，u，o と [−ATR] グループ ɪ，ɛ，ʊ，ɔ に分類され，母音調和の領域（基本的に 1 語根と接辞，後接語からなる語）において，どちらか一方のグループの母音しか現れない（鼻音性は調和に関与しない）。

声調素は，H（High：高平板）と L（Low：低平板）の 2 種類である。本稿では，L は ˋ で，H は ˊ で表記する。

2. 可譲渡／不可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴

Chinebuah（1971）は，不可譲渡名詞の形態論的特徴を提示した。しかし，不可譲渡名詞の所有構文には形態変化だけでなく音韻変化も起こるのだが，このことにはほとんど触れられていない。さらに，Chinebuah（1971）は可譲渡／不可譲渡名詞の所有構文に現れる具体的な違いについても言及していない。可譲渡名詞の所有構文には不可譲渡名詞のような形態上の変化は起こらないが，音韻変化は起こる。このことに触れた研究はこれまでにない。ここでは，筆者が現地調査で得た資料に基づき，可譲渡／不可譲渡名詞の所有構文の音韻・形態論的特徴とその違いを明らかにする。

2.1 不可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴

Chinebuah（1971）が記述したように，身体部位や親族を表す不可譲渡名詞は以下の環境で異なる形を持つ[9]。*ènyìlɛ̀* の例とともに示す（- は接辞境界を，= は接語境界を表す）。

① 単独あるいは所有構文以外で用いられる形
　接頭辞 – 語根 – 接尾辞
　ɛ̀-nyì-lɛ̀
　「目」

② 固有名詞ないし修飾，限定された名詞とともに用いられる形
　a - 語根
　Àkyɛ́ à-nyì
　「アチェの目」

③ 所有接語ないし修飾，限定されない名詞とともに用いられる形
　語根
　ɛ̀=nyí
　「あなたの目」

9) このため，これらの名詞は「変化名詞（variable noun）」と呼ばれる。変化名詞（variable noun）という用語を初めて使ったのは Essuah という人物である（Chinebuah 1971: 42）。Chinebuah（1971）は約 50 語の不可譲渡名詞を挙げる。なお，①〜③の形を Chinebua（1971）はそれぞれ独立形（absolute form），接頭辞形（prefixed possessed form），語根形（possessed root form）と呼ぶ。

不可譲渡名詞を可譲渡名詞と区別するもうひとつの重要な点として，2・3 人称単数所有接語が異なる（不可譲渡名詞は *ɛ=/e=*，*ɔ=/o=*，可譲渡名詞は *wɔ=/wo=*，*yɪ=/yi=*（それぞれ，母音調和に従って分布する異形態）。それ以外の所有接語は同じである）。可譲渡名詞 *èlɛ́kà* と対比させて例示する。

(2)	*mì=nyí*	cf.	*mì=ɛ́-lɛ́kà*
	「私の目」		「私の箱」
	yè=nyí		*yè=ɛ́-lɛ́kà*
	「私達の目」		「私達の箱」
	ɛ̀=nyí		*wɔ̀=ɛ́-lɛ́kà*
	「あなたの目」		「あなたの箱」
	ɔ̀=nyí		*yì=ɛ́-lɛ́kà*
	「彼／彼女の目」		「彼／彼女の箱」
	bɛ̀=nyí		*bɛ̀=ɛ́-lɛ́kà*
	「あなた達／彼らの目」		「あなた達／彼らの箱」

このような形態論的特徴を持つ名詞は，筆者のデータにおいて 36 語が確認された（表 1）[10]。

①～③の作り方にはいくつかの違いがあり，この違いに基づいて Chinebuah（1971）は不可譲渡名詞を 7 つのサブグループ（A~G）に分類する。しかし，このグルーピングには問題もあり，筆者のデータが欠如しているものもある。本稿では筆者のデータの音韻・形態論的特徴に基づき，不可譲渡名詞を I グループと II グループに分類する。I グループは独立形の接辞（の有無）の違いにより，I-i，I-ii，I-iii グループに下位分類する[11]。I グループはデータの大

10）ただし，意味的に不可譲渡名詞に分類されそうだが，形式的には可譲渡名詞に分類されるものも少なくない。Chinebuah（1971: 45）には，*mògyá*「血」，*áhònlì*「心臓」，*bòwùlé*「骨」，*ányàlɛ̀*「内臓」など可譲渡名詞に属する身体部位名称 21 語が挙げられており，これらは筆者のデータにおいても可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴を示す。

11）Chinebuah（1971）の A~G グループのうち，A グループは本稿の I-i グループに（なお Chinebuah（1971）が挙げていない *ètɛ̀fùmálɛ̀*「舌」，*ɛ̀kɔ̀mìzálɛ̀*「喉」，*ɛ̀vílé*「脇腹」を I-i グループに加えた），C グループは I-ii グループに，G グループは I-iii グループに対応する（なお，A，C，G グループは独立形での接辞の有無と接頭辞の種類が異なるが，接頭辞はかつての名詞クラス体系の残存であることが指摘されており（cf. Osam 1993），可譲渡／不可譲渡名詞の区別に直接は関係ないと思われる）。F グループは II グループに対応する。B グループは複合語であり，本稿では不可譲渡性がマークされるのは語根に対してであるとの立場から対象外とする。また，D グループと E グループについては，適切なデータが得られていないため，本稿では扱わない。D，E グループの概要は以下の通り。D グループに分類されるのは位置関係を表す以下の 3 語で，いずれも 3 つの形を持つものの，*wɔ̀̀lé* は 2・3 人称単数所有接語 *ɛ=*，*ɔ=* を取るが，*nùhúá* は（可譲渡名詞のように）*wo=*，*yí=* を取る。またその際，語根形（*nu*）だけでなく独立形（*nuhua*）も現れる。*zòlé* は所有接語を取らない（注 11 で挙げる例は Chinebuah（1971）による）。

wɔ̀̀-lé	*Àkyɛ́ á-wɔ̀̀*	*ɔ́=wɔ́́*
「外」	「アチェの外」	「彼／彼女／それの外」
nù-húá	*sùá nì á-nù*	*yì=nú/yì=nú-húá*
「中」	「家の中」	「彼／彼女／それの中」
zò-lé	*sùá nì á-zò*	*sùá zó*
「てっぺん」	「その家のてっぺん」	「家のてっぺん」

E グループは，主に身体部位を表す語であるが，特定の独立形を持たず，強いて言及するときは 1 人称複数所有接語 *yɛ=/ye=* もしくは 2・3 人称複数所有接語 *bɛ=/be=* を伴う形で表す（なお E ↗

表 1　不可譲渡名詞

I-i グループ					
ètìlè	「頭」	*èfɔ̀kálè*	「頬」	*èkòtòálè*	「臍」
èwɔ̀̀málè	「額」	*èkɔ̀mìlé*	「首」	*èsàlè*	「手」
ènyìlè	「目」	*èkɔ̀mìzálè*	「喉」	*ènìlè*	「声」
èzɔ̀̀lè	「耳」	*èbàtìlé*	「肩」	*ègyàkè*	「足」
èbònyìlè	「鼻」	*èvɪ́́lé*	「脇腹」	*ènyúlʉ́*	「顔」
èlɔ̀̀ǎ́lè	「口」	*èzɪ̀̀lè*	「腰」	*èzɪ́*	「背中」
ètèfùmálè	「舌」	*èbùtʉ̀̀ǎ́lè*	「尻」	*èbó*	「下半身」
ègyèlè	「歯」	*èkèrǎ́lè*	「胸」	*àgɔ̀wɔ̀̀lé*	「友人」
èkèsálè	「顎」	*èkòlè*	「腹」		

I-ii グループ		I-iii グループ	
nyèfɔ́̀lè	「乳房」	*àdìèmà*	「兄弟姉妹」
tòdɔ́lè	「（女の）陰部」	*àwùvùànyì*	「オジ」
tòálè	「陰茎」		
yìlé	「妻」		
ràlè	「子」		

II グループ	
sìlé	「父」
nɪ̀̀lɪ́	「母」
kʉ̀̀lɪ́	「夫」

半の 33 語を占め，そのうち I-i は 26 語，I-ii は 5 語，I-iii は 2 語である。II グループは 3 語である。

2.1.1 単独形

単独で現れるときの形（以下，単独形）[12] は，まず，I-i グループは接頭辞 *ɛ-/e-* と接尾辞 *-lɛ/-le* を取る（*ɛ-/e-*，*-lɛ/-le* は，それぞれ母音調和に従って分布する異形態）[13]。接頭辞の声調は L，接尾辞の声調は L または H である。

(3)　I-i グループ

ɛ̀-nyì-lɛ̀	*ɛ̀-lɔ̀ǎ́-lɛ̀*	*è-tèfùmá-lè*
「目」	「口」	「舌」

I-ii グループは，接頭辞がなく，接尾辞 *-lɛ* のみを取る。接尾辞の声調は L または H である。

(4)　I-ii グループ

nyèfɔ́̀-lè	*yì-lé*	*rà-lè*
「乳房」	「妻」	「子」

↗　グループの *èbó*「下半身」，*èzɪ́*「背中」，*ènyúlʉ́*「顔」は，筆者のデータでは I-i グループと同じ音韻・形態論的特徴を持つため，I-i グループに分類する）。

bè=bó	*Àkyé á-bò*	*ɔ̀=bó*
「下半身」	「アチェの下半身」	「彼／彼女の下半身」

12）本稿では，Chinebuah（1971）の不可譲渡名詞のみに使われる「独立形」と区別し，単独で現れる形を「単独形」と呼ぶ。

13）*àgɔ̀wɔ̀̀lé*「友人」のみ接頭辞 *a-* を取る。また，*ègyàkè*「足」，*ènyúlʉ́*「顔」，*èzɪ́*「背中」，*èbó*「下半身」は接尾辞を取らない。

I-iii グループは接頭辞 *a-* を取るが，接尾辞を取らない。接頭辞の声調は L である。

(5) I-iii グループ

à-dièmà	*à-wùvùànyì*
「兄弟姉妹」	「オジ」

II グループは，接頭辞がなく，接尾辞 *-lɛ/-lĩ* を取る。接尾辞の声調は H である。

(6) II グループ

sì-lɛ́	*nɩ̃̀-lɩ̃́*	*kʊ̃̀-lɩ̃́*
「父」	「母」	「夫」

2.1.2 固有名詞を伴う所有構文

I グループは，固有名詞を伴う所有構文において，接頭辞が *a-* に変わり，接尾辞は失われる。もともと接頭辞を持たない I-ii グループは，*a-* が付く。もともと接頭辞 *a-* を持ち接尾辞を持たない I-iii グループは，単独形から変化がない。

声調の現れ方は，I グループでは，まず *a-* は前部要素末の逆の声調になる（すなわち前部要素が H で終わるときは L，L で終わるときは H になる）[14]。さらに，語根全体が L になる。

(7) I-i グループ

ɛ̀-nyì-lɛ̀	*Yàbá à-nyì*	*Àkúbà á-nyì*
「目」	「ヤバの目」	「アクバの目」
ɛ̀-lɔ̀ɔ̃́-lɛ̀	*Àkyɛ́ à-lɔ̀ɔ̃̀*	*Ákà á-lɔ̀ɔ̃̀*
「口」	「アチェの口」	「アカの口」
ɛ̀-tɛ̀fʊ̀má-lɛ̀	*Kɔ̀fí à-tɛ̀fʊ̀mà*	*Àkúbà á-tɛ̀fʊ̀mà*
「舌」	「コフィの舌」	「アクバの舌」

(8) I-ii グループ

nyɛ̀fɔ̃́-lɛ̀	*Yàbá à-nyɛ̀fɔ̃̀*	*Àkúbà á-nyɛ̀fɔ̃̀*
「乳房」	「ヤバの乳房」	「アクバの乳房」
yì-lɛ́	*Kɔ̀fí à-yì*	*Ákà á-yì*
「妻」	「コフィの妻」	「アカの妻」
rà-lɛ̀	*Àkyɛ́ à-rà*	*Àkúbà á-rà*
「子」	「アチェの子」	「アクバの子」

(9) I-iii グループ

à-dièmà	*Àkyɛ́ à-dièmà*	*Ákà á-dièmà*
「兄弟」	「アチェの兄弟」	「アカの兄弟」

14）Chinebuah（1971）の資料では，接頭辞の声調は前部要素末に同化している。これが方言差なのか歴史的変化なのか，要調査である。

à-wùvùànyì	*Kòfí à-wùvùànyì*	*Àkúbà á-wùvùànyì*
「オジ」	「コフィのオジ」	「アクバのオジ」

なお，Chinebuah（1971）は，この *a-* について，独立形の *ɛ-/e-* が変化したもの，あるいは接頭辞と接尾辞が無くなった後に付いたものという 2 通りの解釈を挙げるが，(8) のように，もともと接頭辞を持たないものにも *a-* は付くこと，2.1.3 に述べるように所有接語を伴う所有構文でも接頭辞と接尾辞が無くなることから，接辞が失われた後に所有マーカー *a-* が付いたと考えるのが妥当である。

一方，II グループは形態面で I グループと振る舞いを異にする。まず，*a-* ではなく 3 人称単数所有接語 *ɔ=/o=* が現れる。ただし，Chinebuah（1971）のデータでは 3 語とも *ɔ=/o=* を取るが, 筆者のデータでは *nìlí* では *a-* でも *o=* でもよく, *kùlí* では *o=* が現れる形は得られなかった。なお, この *ɔ=/o=* も *a-* と同様の声調の振る舞いをする（前部要素末の逆の声調になる）[15]。また，Chinebuah（1971）の記述したように語根の子音交替が起こる（*s : z, n : l, k : h*）。この子音交替については，一種の緩音化であるとみなされる。*s : z* は有声音化，*n : l* は側面音化，*k : h* は摩擦音化によるものである。

(10) II グループ

sì-lé	*Yàbá ɔ̀=zì*	*Àkúbà ɔ́=zì*
「父」	「ヤバの父」	「アクバの父」
nì̀-lí	*Àkyɛ́ à-lì̀ ~ ò=lì̀*	*Ákà á-lì̀ ~ ó=lì̀*
「母」	「アチェの母」	「アカの母」
kù̀-lí	*Yàbá à-hù̀*	*Àkúbà á-hù̀*
「夫」	「ヤバの夫」	「アクバの夫」

2.1.3 所有接語を伴う所有構文

所有接語を伴う所有構文では，すべてのグループで接頭辞および接尾辞が失われる（もともと接頭辞を持たない I-ii，II グループは接尾辞のみ失われ，もともと接尾辞を持たない I-iii グループは接頭辞のみ失われる）。なお，2.1 で述べたように，不可譲渡名詞は 2 人称単数所有接語 *ɛ=/e=*，3 人称単数所有接語 *ɔ=/o=* を取り，可譲渡名詞（それぞれ *wɔ=/wo=*，*yɪ=/yi=*）と異なる（それ以外の所有接語は同じ）。

声調は，I グループは，所有接語が L，語根第一音節が H で，それ以降は L になる。

(11) I-i グループ

ɛ̀-nyì-lɛ̀	*ɛ̀=nyí*	*ɔ̀=nyí*
「目」	「あなたの目」	「彼／彼女の目」
ɛ̀-lɔ̀ǎ-lɛ̀	*ɛ̀=lɔ́ǎ̀*	*ɔ̀=lɔ́ǎ̀*
「口」	「あなたの口」	「彼／彼女の口」
ɛ̀-tɛ̀fùmá-lɛ̀	*ɛ̀=tɛ́fùmà*	*ò=tɛ́fùmà*
「舌」	「あなたの舌」	「彼／彼女の舌」

15）*ɔ=/o=* が接語から接辞へ文法化しているのではないかと考えられる。

(12) I-ii グループ

nyɛ̀fɔ̋-lɛ̀	*ɛ̀=nyɛ́fɔ̀̋*	*ɔ̀=nyɛ́fɔ̀̋*
「乳房」	「あなたの乳房」	「彼女の乳房」
yì-lɛ́	*ɛ̀=yí*	*ɔ̀=yí*
「妻」	「あなたの妻」	「彼の妻」
rà-lɛ̀	*ɛ̀=rá*	*ɔ̀=rá*
「子」	「あなたの子」	「彼／彼女の子」

(13) I-iii グループ

à-dìèmà	*è=díèmà*	*ò=díèmà*
「兄弟」	「あなたの兄弟」	「彼／彼女の兄弟」
à-wùvùànyì	*è=wúvùànyì*	*ò=wúvùànyì*
「オジ」	「あなたのオジ」	「彼／彼女のオジ」

一方，II グループは語根に H が実現しない。また，固有名詞を伴う所有構文と同じく，語根子音に緩音化が起こる。

(14) II グループ

sì-lɛ́	*ɛ̀=zì*	*ɔ̀=zì*
「父」	「あなたの父」	「彼／彼女の父」
nɩ̀̃-lɩ́	*è=lɩ̀̃*	*ò=lɩ̀̃*
「母」	「あなたの母」	「彼／彼女の母」
kʊ̀̃-lɩ́	*è=hʊ̀̃*	*ò=hʊ̀̃*
「夫」	「あなたの夫」	「彼女の夫」

2.1.2，2.1.3 で示したように，本稿では不可譲渡名詞を所有構文での音韻・形態論的特徴に基づき，大きく 2 つのグループに分類した。I グループは，形態面については，接頭辞と接尾辞が失われ，さらに固有名詞を伴う所有構文で所有マーカー *a-* が付く。声調の振る舞いについては，まず所有構文で語根全体が L になる。また，固有名詞を伴う所有構文では *a-* が前部要素末の逆の声調になり，所有接語を伴う所有構文では，語根頭音節が H になる。一方，II グループは, 形態面では, 固有名詞を伴う所有構文で *a-* でなく *ɔ=/o=* を取る。音韻面では, まず, 所有構文で語根子音の緩音化が起こる。また，所有接語を伴う所有構文で，I グループと異なり語根に H が実現しない。

2.2 可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴

2.1 で挙げた不可譲渡名詞以外の名詞は，意味的には，基本的に他人から手に入れたり，人に譲ったりできるものを表す[16]（表 2 に一部を挙げる）。これらの可譲渡名詞は，所有構文で形態面での変化はないが[17]，声調変化があり，この変化は不可譲渡名詞の場合と異なる。この

16）ただし注 10 で述べたように，この原則に沿わないものもある。
17）このため，Chinebuah（1971）では「不変化名詞（non-variable noun）」と呼ばれる。これまでの調査では 373 語が得られた（複合語は除く）。

表 2 可譲渡名詞の例

àbèlè	「トウモロコシ」	*èdànlɛ́*	「布」	*kyèlè*	「帽子」
àlùbà	「豆」	*èlùé*	「ヤムイモ」	*mògyá*	「血」
àgbúyà	「針」	*èsàmɔ̀*	「小麦粉」	*nànì*	「肉」
áhònlì	「心臓」	*èvǐlí*	「垢」	*bèdè*	「キャッサバ」
àkɔ́ndí	「フフ」	*èwɔ̀lè*	「ヘビ」	*bòtòkúmá*	「拳」
àkùmá	「斧」	*èwùlè*	「病気」	*bòwùlé*	「骨」
álìè	「食べ物」	*hã̀lɛ́*	「怪我」	*dàdìè*	「ナイフ」
ányàlè	「内臓」	*kápìnlì*	「傷」	*ǹkwání*	「スープ」
àwànì	「肩」	*kèlátà*	「紙」	*ǹwòlì*	「油」
àyìlé	「薬」	*kòlònvíá*	「卵」	*ǹzã́*	「酒」
èdà	「弓矢」	*kùtùkú*	「蒸留酒」	*ǹgònlè*	「部族マーク」

ことはChinebuah（1971）では触れられていない。ここでは，形態面だけでなく，声調面にも可譲渡／不可譲渡名詞の区別が現れていることを示す。

2.2.1 単独形

可譲渡名詞は，単独では以下の形を取る。接頭辞には *a-*，*ɛ-/e-*，*N-*（*N-* は語根頭子音の同調音点鼻音）が，接尾辞には *-lɛ/-le* があり，接頭辞も接尾辞も取るもの，いずれかを取るもの，いずれも取らないものとがある。

$$\begin{bmatrix} a- \\ \varepsilon-/e- \\ N- \\ \phi- \end{bmatrix} \text{語根} \begin{bmatrix} -l\varepsilon/-le \\ -\phi \end{bmatrix}$$

（15）のように，声調は，接頭辞はほとんどがLだが，H接頭辞 *a-* を取るものも若干ある。接尾辞はLまたはHで，不可譲渡名詞と同じである。可譲渡／不可譲渡名詞は，接辞の有無とその種類によってある程度区別されるが，（16）のように同形態，声調を示す可譲渡／不可譲渡名詞もあるため，単独形で完全に区別されるわけではない。

（15） *è-dàn-lɛ́* *è-lùé* *à-bè-lè* *á-lìè*
「布」 「ヤムイモ」 「トウモロコシ」 「食べ物」
ǹ-gòn-lè *ǹ-kwání* *kyè-lè* *mògyá*
「部族マーク」 「スープ」 「帽子」 「血」

（16） *è-wɔ̀-lè* cf. *è-nyì-lè*（不可譲渡名詞）
「ヘビ」 「目」
hã̀-lɛ́ cf. *yì-lɛ́*（不可譲渡名詞）
「怪我」 「妻」
à-lùbà cf. *à-dièmà*（不可譲渡名詞）
「豆」 「兄弟」

2.2.2 固有名詞を伴う所有構文

可譲渡名詞と不可譲渡名詞の違いは，所有構文においてはっきりと現れる。（17）に示すよ

うに，まず，可譲渡名詞は不可譲渡名詞と異なり，所有構文において形態が変化しない。すなわち，単独形で持つ接頭辞および接尾辞が，所有構文においても現れる。

形態は変化しないが，可譲渡名詞は所有構文で声調変化が起こる。固有名詞を伴う所有構文では，語頭つまり接頭辞または語根頭が前部要素末と逆の声調になる。それ以降の声調は変わらない。

(17)	*è-dàn-lɛ́*	*Àkyé è-dàn-lɛ́*	*Ákà ɛ́-dàn-lɛ́*
	「布」	「アチェの布」	「アカの布」
	è-lùé	*Àkyé è-lùé*	*Ákà é-lùé*
	「ヤムイモ」	「アチェのヤムイモ」	「アカのヤムイモ」
	á-lìɛ̀	*Àkyé à-lìɛ̀*	*Ákà á-lìɛ̀*
	「食べ物」	「アチェの食べ物」	「アカの食べ物」
	mògyá	*Àkyé mògyá*	*Ákà mógyá*
	「血」	「アチェの血」	「アカの血」
	kyɛ̀-lɛ̀	*Àkyé kyɛ̀-lɛ̀*	*Ákà kyɛ́-lɛ̀*
	「帽子」	「アチェの帽子」	「アカの帽子」

（18）のように，もともと *a-* を取る可譲渡名詞は，所有構文で形態上は不可譲渡名詞と変わらないが，語根に H があれば，語根全体が L になる不可譲渡名詞と声調で区別される。

(18)	*à-kùmá*	*Àkyé à-kùmá*	cf.	*ɛ̀-kɛ̀sá-lɛ̀*（不可譲渡名詞）	*Àkyé à-kɛ̀sà*
	「斧」	「アチェの斧」		「顎」	「アチェの顎」

2.2.3 所有接語を伴う所有構文

2.1 で述べたように，所有接語を伴う所有構文で，可譲渡名詞は 2 人称単数所有接語 *wɔ=/wo=*，3 人称単数所有接語 *yɪ=/yi=* を取り，不可譲渡名詞（それぞれ *ɛ=/e=*，*ɔ=/o=*）と異なる（それ以外の所有接語は同じ）。

（19）に示すように，所有接語の声調は L で，不可譲渡名詞と同じである。語根頭または接頭辞は H になるが，それ以降の声調は変わらない。

(19)	*ɛ̀-dàn-lɛ́*	*wɔ̀=ɛ́-dàn-lɛ́*	*yì=ɛ́-dàn-lɛ́*
	「布」	「あなたの布」	「彼の布」
	è-lùé	*wò=é-lùé*	*yì=é-lùé*
	「ヤムイモ」	「あなたのヤムイモ」	「彼のヤムイモ」
	á-lìɛ̀	*wɔ̀=á-lìɛ̀*	*yì=á-lìɛ̀*
	「食べ物」	「あなたの食べ物」	「彼の食べ物」
	mògyá	*wò=mógyá*	*yì=mógyá*
	「血」	「あなたの血」	「彼の血」
	kyɛ̀-lɛ̀	*wɔ̀=kyɛ́-lɛ̀*	*yì=kyɛ́-lɛ̀*
	「帽子」	「あなたの帽子」	「彼の帽子」

（20）のように，もともと接頭辞も接尾辞も持たない可譲渡名詞は，2・3 人称単数以外の所有接語を伴う所有構文で不可譲渡名詞と形が同じになるが，語根第一音節以降に H があれば，不可譲渡名詞と声調で区別される。

(20)	*mògyá*	*mì=mógyá*	cf. *nyèfɔ̀-lɛ̀*（不可譲渡名詞）	*mì=nyɛ́fɔ̀*
	「血」	「私の血」	「乳房」	「私の乳房」

2.2.2，2.2.3 で示したように，可譲渡名詞は不可譲渡名詞と異なり，所有構文で形態上の変化はないが，声調変化はある。この声調変化は不可譲渡名詞のそれと異なり，不可譲渡名詞では語根全体に変化が起こるが，可譲渡名詞では接頭辞または語根頭にのみ変化が起こる。このように，可譲渡／不可譲渡名詞の所有構文の区別は，形態だけでなく音韻面（声調）にも現れている。

3. まとめと考察

ンゼマ語に可譲渡／不可譲渡名詞の区別があることは Chinebuah（1971）によって指摘されたが，彼が取り上げたのは，もっぱら不可譲渡名詞の形態論的特徴であった。本稿では，筆者が現地調査で得たデータに基づき，不可譲渡名詞は所有構文において形態変化だけでなく音韻変化も示すこと，可譲渡名詞は所有構文において形態変化はないが音韻変化は起こること，この変化は不可譲渡名詞と異なり，両者の所有構文の区別が形態面だけでなく音韻面にも現れることを示した。また，筆者のデータの音韻・形態論的特徴に基づき，不可譲渡名詞を 2 つのサブグループに分類した。

本稿で取り上げた不可譲渡名詞 I，II グループと可譲渡名詞の音韻・形態論的特徴をまとめると，以下のようになる。

不可譲渡名詞 I グループ	
単独形	・構造：　*ɛ-/e-* 語根 *-lɛ/-le* （ただし一部の接頭辞は *a-*。また一部は接頭辞／接尾辞を取らない）
＋固有名詞 所有構文	・構造：　固有名詞　*a-* 語根 ・*a-* は前部要素末の逆の声調，語根全体は L。
＋所有接語 所有構文	・構造：　所有接語＝語根 ・2 人称単数所有接語 *ɛ=/e=*，3 人称単数所有接語 *ɔ=/o=* を取る。 ・語根第一音節が H で以降は L。

不可譲渡名詞 II グループ	
単独形	・構造：　語根 *-lɛ*，*-lĩ*
＋固有名詞 所有構文	・構造：　固有名詞　*a-* 語根　または　固有名詞　*ɔ=/o=* 語根 ・語根子音の緩音化 ・*a-*，*ɔ=/o=* は前部要素末の逆の声調，語根は L。

＋所有接語 所有構文	・構造：　所有接語 = 語根 ・2 人称単数所有接語 *ɛ=/e=*，3 人称単数所有接語 *ɔ=/o=* を取る。 ・語根子音の緩音化 ・語根は L。

可譲渡名詞	
単独形	・構造：　[*a-* / *ɛ-/e-* / *N-* / *ϕ-*] 語根 [*-lɛ/-le* / *-ϕ*]
＋固有名詞 所有構文	・構造：　固有名詞　単独形 ・接頭辞／語根頭は前部要素末と逆の声調, それ以降の声調は単独形と同じ。
＋所有接語 所有構文	・構造：　所有接語 = 単独形 ・2 人称単数所有接語 *wɔ=/wo=*，3 人称単数所有接語 *yɪ=/yi=* を取る。 ・接頭辞／語根頭は H，それ以降の声調は単独形と同じ。

可譲渡／不可譲渡名詞の所有構文の違いを簡潔にまとめると，形態面では，接辞が失われるか（不可譲渡名詞）保持されるか（可譲渡名詞），固有名詞を伴う所有構文で所有マーカーの *a-* が付くか（不可譲渡名詞）付かないか（可譲渡名詞）という違いであり，声調面では，接頭辞／語根頭にのみ声調変化が起こるか（可譲渡名詞）語根全体の声調が変化するか（不可譲渡名詞）という違いである。

可譲渡名詞が所有構文において接頭辞／語根頭の声調変化のみによってマークされるのに対し，不可譲渡名詞のマーカーは形態，音韻論的に複雑である。すなわち，後者は，語根全体の低声調化，接辞と所有マーカー *a-* の交替（固有名詞を伴う所有構文の場合），語根頭の高声調化（所有接語を伴う所有構文の場合）によってマークされる。不可譲渡名詞の所有構文におけるマーカーの方が単純であるという一般的傾向に反しているように見えるが，このような変化により音節数が少なくなり，語根全体が低声調化するため，所有構文全体は音韻・形態論的に単純化している。

II グループの *sìlɛ́*「父」，*nìlɪ́*「母」，*kʊ̀lɪ́*「夫」は，所有構文の音韻・形態論的単純化（融合）がさらに顕著である。この 3 語は，まず，語根が 1 音節のみからなる。また，所有接語を伴う所有構文で，構文全体の声調が L になる（他の不可譲渡名詞は語根頭が上がる）。さらに，語根子音の緩音化が起こる。

このようなサブグループの存在は，ンゼマ語において，可譲渡名詞と不可譲渡名詞が二項対立するというよりも，不可譲渡性は程度の問題であることを示すものと考えられる[18]。不可譲渡性が高いほど音韻・形態論的により単純になるとすると，不可譲渡性の程度が高い順から以下のように示される。

不可譲渡名詞 II グループ＞不可譲渡名詞 I グループ＞可譲渡名詞

18）3 種類以上の所有構文を持ち，それらの間に譲渡性の段階性が認められる言語はいくつかの研究で報告されている（cf. Ameka 1996, Osumi 1996）。

なお，Chinebuah（1971）の資料では *sìlé*，*nìlí*，*kùlí* の 3 語とも固有名詞を伴う所有構文で *a-* ではなく 3 人称単数所有接語 *ɔ=/o=* が現れるが，筆者のデータでは *nìlí* では *a-* と *o=* が自由交替し，*kùlí* では *o=* が現れる形は得られなかったため，不可譲渡名詞内でのサブグループ間の区別が失われつつあるのかもしれない。

最後に，固有名詞を伴う所有構文で，なぜ可譲渡名詞／不可譲渡名詞の接頭辞もしくは語根頭が前部要素末と逆の声調になるのか，所有接語を伴う所有構文で可譲渡名詞／不可譲渡名詞の接頭辞／語根頭の H がどこから来たのか，という問題についてであるが，一つの解釈として，接頭辞／語根頭の H も L 所有接語の逆声調化によるもので，両者は同現象であり，可譲渡名詞も不可譲渡名詞も語根頭または接頭辞の声調は前部要素末声調の極性で決まるのではないか。これは一種の境界的機能ではないかと考える[19]。こういった問題については，ンゼマ語だけでなく，同系統諸言語間の比較対照研究を視野に入れて検討しなければならない。

参　考　文　献

Ameka, F. 1996. “Body parts in Ewe grammar.” *The Grammar of Inalienability: A Typological Perspective on Body Part Terms and the Part-Whole Relation* (H. Chappell and W. McGregor, eds.), 783–840, Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Berry, J. 1955. “Some notes on the phonology of the Nzema and Ahanta dialects.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 17: 160–165.

Chinebuah, I.K. 1971. “Variable nouns in Nzema.” *Journal of African Languages*, 10(3): 42–64.

Creissels, D. 2000. “Typology.” *African Languages, An Introduction* (B. Heine and D. Nurse, eds.), 231–258, New York: Cambridge University Press.

Dolphyne, F.A. 1986. “Tone and grammar in Akan: The tone of possessive constructions in the Asante dialect.” *The phonological representation of suprasegmentals* (K. Bogers, H. Hulst and M. Mous, eds.), 35–49, Dordrecht, Holland: Foris Publications.

————. 1988. *The Akan (Twi-Fante) language, its sound systems and tonal structure*. Accra: Ghana Universities Press.

Haiman, J. ed. 1985. *Iconicity in syntax*. Amsterdam: John Benjamins.

Lewis, M.P. ed. 2009. *Ethnologue: Languages of the World, 16th Edition*. Dallas, Tex.: SIL International. Online version: http://www.ethnologue.com/

Nichols, J. 1988. “On alienable and inalienable possession.” *In honor of Mary Haas* (W. Whipley, ed.), 557–609, Berlin: Mouton de Gruyter.

Nichols, J. and B. Bickel. 2013. “Possessive Classification.” *The World Atlas of Language Structures Online* (M.S. Dryer and M. Haspelmath, eds.), http://wals.info/chapter/59

Osam, E.K. 1993. “The loss of the noun class system in Akan.” *Acta Linguistica Hafniensia,* 26: 81–106.

Osumi, M. 1996. “Body parts in Tinrin.” *The Grammar of Inalienability: A Typological Perspective on Body Part Terms and the Part-Whole Relation* (H. Chappell and W. McGregor, eds.), 433–462, Berlin, New York: Mouton de Gruyter.

Welmers, W.E. 1973. *African Language Structures*. Barkeley, Los Angeles, London: University of California Press.

古閑恭子　2009 「アカン語の名詞の声調」『言語研究』135: 151–165.

清水紀佳　1988 「アフリカの諸言語」『言語学大辞典 第 1 巻 世界言語編（上）』（亀井孝，河野六郎，千野栄一編），237–439，東京：三省堂 .

採択決定日―2018 年 8 月 9 日

19）なお, Chinebuah（1971）の資料では, *a-* の声調は前部要素末に同化している（注 14）。Chinebuah（1971）の資料と筆者の資料との違いが通時的変化によるものだとしたら，所有接語を伴う所有構文における高声調化（逆声調化）からの類推で固有名詞を伴う所有構文でも本来の声調同化から逆声調化に変化したのかもしれない。